

昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可
昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可
昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可

經濟論叢

第104卷 第3号

哀 辞

故鎌倉 昇教授遺影および原稿

経営戦略について……………	田 杉 競	1
ニュースと「企業性」の接点……………	島 崎 憲 一	23
フィスカル・ポリシーと完全雇用……………	森 岡 孝 二	41

記 事

鎌倉教授逝く

追悼講演 (石川常雄・市村真一・堀江保蔵)

追憶談 (杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋)

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京 都 大 学 經 濟 学 會

追憶談

鎌倉昇教授・追想

杉浦一平

故鎌倉昇教授の友人の端に連るものとして、追憶を語る機会を与えられました事を、京都大学経済学会に対し感謝申し上げます。私はその資格のないものではありませんが、語らねばならないものをもってのいるからであります。

御列席の多くの方々と同じく、私も、今だに鎌倉さんがすでにこの世にないという事実が、どうしても納得ゆきません。彼ほどヴァイタリティをもった人も珍しかったが、そのヴァイタリティの故に彼をかくも早く失わねばならなかったことに、割り切れぬものを覚えます。私の鎌倉さんとの出逢いと、知る由もなかった別れとを語って、私にとっての鎌倉さんを偲びたいと思います。

鎌倉さんと知り合ったのは、昭和22年、彼が京都大学に入った直後であります。彼の丁度後半生を通じて彼に接し得たのでありますが、私はそれを無上の幸であったと感じています。たまたま近所に住んでいたこと、同年であったこと、彼が大阪商大高商部の出身で、大阪商科大学学生であった私と、共通の話題が多かったこと、ほぼ同じ戦争経験をもち、共に経済学に志していたこと等から、急速に深い交りを経ぶようになりました。

昭和23年青山先生の門下に入った鎌倉さんの学識は、横で見ている息を呑むほど、急激な開花を始めました。この頃から私達が幹事役を承って、近代経済理論研究会なるものが発足し、理論経済学会がまだ発足していなかった当時、西宮の篤志家、菅井氏の宅で、先生方をお招きして学会を開いたり、ガリ刷の雑誌「近代経済理論研究」を発行したり致しました。この会を通じて、鎌倉さんの懇篤な紹介によって、私も青山先生の知過を得ることが出来、さらに、森嶋・馬場・市村・建元等の方々に兄事することができるようになりました。

当時は経済学に志すものにとっては、正にシュトルム・ウント・ドラंकの時代でした。自分の大学に、直接的な指導を乞うべき適当な先輩をもたなかった私には、所謂ケインズ革命の本質がよくわからなかったし、奔流のような理論経済学の展開に、なすすべもなく立すくむだけでした。特に青山門下が、今日の近より難い偉容のための、強固な基礎工事を完成しつつあった時期です。自分と同年の方達に比してのみじめさが、私を絶望に追いやりました。

鎌倉さんに私の悩みを語ったことから、24年から26年にかけて殆んど二年に近く、鎌

倉さんは私に個人教授を始めて呉れました。「価値と資本」や「価格伸縮性と雇傭」を中心に何十かの論文を手写し乍ら読みました。彼の暖かい友情と、今では彼のトレード・マークにすらなつた簡潔・明快な説明がなかったら、私はおそらく、研究を続ける自信と意欲とを失つていただろうと思います。私は幸にして学問の世界で、師事し兄事する先輩に数多く恵まれましたが、その多くが鎌倉さんを通じて知遇を得るようになったのですし、鎌倉さん自身は、言葉の正確な意味で、私の友人とすべき人でなく、私の恩師なのです。

永々と私事にわたる追憶が続いて恐縮ですが、今一つ。私がこの機会を与えられた事を知って、私の老母が、是非共鎌倉さんの霊前で心よりの感謝を述べてくれと申したことがございます。大学卒業の直後、ある不幸な事件から、私は学業を断念しかけたことがございます。その時、私を叱り母をなぐさめて、決心を更めて固めるようにして下さいしたのは鎌倉さんでした。半月近くも殆んど連日にわたってそのことだけのために訪ねて下さった。老母にとって、あなたは、私達母子のために神の使わされた人です。

今日の日本の繁栄など予想も出来なかつた時代の話です。学園は今と同じように、いや、今以上に荒れて乱れており、手写しなければ論文もよめず、なけなしの金をもちよつて論文集を自分等の手で印刷した時代。青山先生や、堀経夫先生秘蔵のタイプライターを借りては一日のぼしに返却を遅らせ、「われわれを困らすために、こんな論文書いたんとちがうやろか」と言い乍ら、森嶋さんや横山さんのきたない原稿を、鎌倉さんが読み上げ、私がガリを切つたあの頃、餓えるまでに貧しかったが故に、皆が純粋に学問に集中し、協力し合つた、あの輝ける時代。その思い出が、すべて、私には、友とは人生において如何なる意味をもつかを、身をもって示して下さいました鎌倉さんにつながっています。

春風秋霜すでに20年を経ました。良きも悪しきも、さまざまの出来事がこの20年間にありましたが、20年前のことが、昨日のことよりも詳細に思い出されます。あれから20年もの歳月を経た筈がない。今ここに遺影を前に語るなどという悪夢からは、早く醒めねばならない。

私達はここ数年、お互に多忙なままに、年に数回、折にふれて逢うに止まるようになりました。彼は、逢うたびに5～6分の時間を割いて近況を語り合う機会をつくってくれました。

6月6日、京大経済研究所での研究会が早く了つたので、ふと思いついて電話しました。多忙な彼には珍らしく、「今、時間があいているからすぐ来て下さい」との事で、私達は全く何年ぶりかで、彼の研究室で四方山の長話をしました。それが、丁度1ヶ月後に永久に去ってしまう人との惜別のために、天が私に与えて呉れた機会であつたとは。

話は最後に自然に大学紛争の事に及びました。「出来るだけ、平常のままに近く、授業をし、研究をするように努めるべきだ。それが、何者も犯し得ず、最後に残るものであることを、学生に実感として示すことのできるチャンスではないか」この言葉が、私の、このよき師、よき友の最後の教えとなりました。

今や、棺の蓋は閉じられました。学者として、教師としての鎌倉さんについては、多くが語られました。ここには、私と同じように20年以上も鎌倉さんに接し、彼をめぐって起ったすべて、彼のなしたすべてを、知り尽くしている友人達が集っています。この方々と自分とを証人として、鎌倉さんの人間についての評価を敢てして、追憶を終りたいと思います。

「見よ、ここに 人あり」